



Title	第2章 アイヌ民族の階層形成
Author(s)	野崎, 剛毅
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 33, 35-48
Issue Date	2015-05-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59143
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_33_35-48.pdf



第2章 アイヌ民族の階層形成

野崎 剛毅 | 札幌国際大学短期大学部准教授

はじめに

本章では、白糠アイヌ調査の結果をもとに、アイヌの人々の階層がどのように形成されていくのかを、主に教育とライフコースに注目して考察する。

われわれはこれまでに、札幌市・むかわ町（野崎 2012）、新ひだか町（野崎 2013）、伊達市（野崎 2014a）の各地域においてもアイヌの人々への聞き取り調査を行っており、階層形成に関する同様の分析を試みている。そこでは対象者を3つの年齢階層（青年層（30代以下）、壮年層（40代、50代）、老年層（60代以上））と性別を組み合わせた6つのカテゴリーに区分し、それぞれで異なる階層形成のメカニズムを見出した。

まず、男性においては世代によって学歴のもつ効果が異なることが示されている。地域によってその表れ方は異なるものの、とくに若い世代においては高い学歴を得た者が高い職業階層、あるいは高い収入を得るという単純な構図は成立していない。また、伊達調査からは学歴等よりも、どれだけ1つの職業に長く就いているかが到達階層に大きな影響を及ぼすという結果も得られている。

女性において注目すべき変数は、結婚の有無であった。札幌調査とむかわ調査では、結婚の有無が他のあらゆる変数の効果を打ち消すほどの影響力を持っていた。なお、伊達調査では、同居家族の存在が大きな影響力を示していた。ただし、伊達調査の際は全女性データが離別、死別者を含む結婚経験者であったため、未婚者との比較はできていない。

また、伊達調査ではアイヌの血の濃さが階層形成に与える影響に関しても検討を試みた。その結果、血の濃さは出身階層には少なからぬ影響を与えるものの、その影響力は教育や各ライフイベントによって弱まり、到達階層にはあまり影響を与えなくなっていることがわかった。

これらの知見をもとに、本章では階層形成に対する学歴、結婚や離婚、そして転職の有無や回数、アイヌの血筋などの影響力を考察する。これにより、道東地域におけるアイヌの人々の階層形成の特徴を明らかにしたい。

第1節 データの概要

第1項 対象者

本章では、2014年9月に白糠町で行ったアイヌの人々への聞き取り調査の結果を利用する。ただし、アイヌ調査の回答者のうち、和人として生まれ育ち、結婚等によりアイヌとなった者は分析から除外している。これは、本章の分析で扱う諸変数の多く、すなわち15歳時の家庭状況や学歴などが、結婚よりも前のいわば「和人時代」のものだからである。反対に、和人の家庭で生まれたものの乳幼児期のうちにアイヌの家庭に養子に入ったという対象者は、血筋は和人であるが事実上アイヌとして育っているため、本分析の対象としている。

その結果、対象とする調査データは全部で38ケースとなった。その基本属性を表2-1に示した。対象者は女性に大きく偏っており、男性10人に対して女性が28人である。世代では青年層13人、壮年層10人、老年層15人と極端な偏りは見られないが、男性老年層は0人である。男性の平均年齢は40.6歳、女性は55.0歳である。最年少者は19歳（男女各1名）、最高齢者は87歳である。

表2-1 対象者の基本属性

	男性	女性	計
青年層	5	8	13
壮年層	5	5	10
老年層	0	15	15
計	10	28	38

第2項 出身階層と血筋

分析においては、出身階層として15歳時の暮らしぶりを使用する。これは、中学校を卒業する頃の暮らしぶりを聞いたものを「豊か」「普通」「苦しかった」の3段階に分類したものである。なお、「豊かとはいえない」や「貧しかったけれど当時は皆そうだった」といったものは「普通」に分類している。また、そのような表現であっても、文脈上「苦しかった」と解釈した方が妥当であると判断した場合は、「苦しかった」に分類していることもある。その結果、表2-2にあるように、「豊かだった」者が5人、「普通」だった者が17人、「苦しかった」者が15人、「不明」が1人であった。

表2-2 15歳時の暮らしぶり

		豊かだった	普通	苦しかった	不明	計
青年層	男性	0	2	3	0	5
	女性	1	4	3	0	8
壮年層	男性	1	3	1	0	5
	女性	1	2	2	0	5
老年層	女性	2	6	6	1	15
計		5	17	15	1	38

また、対象者の属性として、血筋についても表2-3にまとめた。ただし先述のとおり、血筋は和人でありアイヌ家庭で養子として育った者が1人いる。アイヌの血を引いている者のうち、両親ともアイヌである者が21人で、片方がアイヌである者が16人であった。様々な場面で指摘されているようにアイヌの血は確実に薄まってきており、両親ともアイヌという者は老年層では14人中12人であるが、青年層では13人中2人まで減少している。なお、祖父母世代まで血筋が判明している21人について見てみると、父方・母方祖父母4人のうち1人がアイヌという者が4人で、全員青年層である。4人中3人がアイヌという者は5人で青年層1人、壮年層3人、老年層1人。祖父母4人全員がアイヌという者は12人で青年層1人、壮年層3人、老年層8人であった。

表2-3 血筋

		両親	片親	計
青年層	男性	2	3	5
	女性	0	8	8
壮年層	男性	4	1	5
	女性	3	2	5
老年層	女性	12	2	14
計		21	16	37

第3項 到達階層

到達階層としては、現在の職業と個人年収に注目する。

男性の職業を見てみると、10人中6人が農林漁業に従事している。5人が漁業、1人が林業である。他に青年層では生産工程従事者と建設・採掘業が、壮年層では輸送・機械運転と建設・採掘業がそれぞれ1人ずつとなっている。全員がブルーカラー職であり、ホワイトカラー職に就いている者はひとりもいなかった。

一方、女性では無職が17人で最も多い。リタイア層である老年層で15人中11人が無職となっているだけでなく、青年層でも8人中4人が、壮年層でも5人中2人が専業主婦を含む無職である。青年層、壮年層の無職者の中には、専業主婦のほか、配偶者と離別した後に生活保護を受けながら育児をしている者や、アイヌ舞踊をしている者などがいる。

有職者のなかで最も多いのはサービス業の6人で内訳はクリーニング店勤務が2人、管理人が2人、飲食店が2人であった。その他、農林漁業が2人、生産工程従事者が2人となっている。

表2-4 現在の職業

		サービス	農林漁業	生産工程 従事者	輸送・ 機械運転	建設・ 採掘	無職 (専業主婦)	その他・ 不明	計
男性	青年		3	1		1			5
	壮年		3		1	1			5
女性	青年	3		1			4		8
	壮年	1	1	1			2		5
	老年	2	1				11	1	15
計		6	8	3	1	2	17	1	38

個人年収および世帯年収を表2-5にまとめている。調査では100万円区切りのカテゴリーで年収を聞いている。表中の「平均」欄は、各カテゴリーの中央値、すなわち0～100万円未満には50万円、100～200万円未満には150万円を代表値として与え計算している。

男性から見てみると、青年層では200～300万円未満が最も多く、平均個人年収は270.0万円である。

壮年層は分散が大きく、100～200万円未満から1000万円以上まで存在する。平均年収は470.0万円であるが、1人だけ個人年収が際立って高い者がおり、平均値を大きく上げている。この1人を外れ値として除外すると、平均年収は325.0万円まで下がる。なお、中央値は300～400万円未満である。

女性の場合、青年層と壮年層に限って見ても、13人中10人が個人年収100万円未満という厳しい状況がある。最も高い者でも200～300万円未満であり、その平均値は青年層で75.0万円、壮年層ではさらに下がって60.0万円であった。

世帯年収に目を転じると、男性は青年層が410.0万円、壮年層が530.0万円となっている。

女性は青年層が192.9万円、壮年層が230.0万円である。世帯年収で見ても、13人中4人が100万円未満と非常に厳しい状況におかれていることがわかる。

表の右端には、白糠住民調査で得られた白糠町の平均値をおいている。男女とも、本調査の対象者が白糠平均を下回っており、本調査結果が地域差の問題ではないことがわかる。とくに女性は、個人年収が青年層で本調査平均75.0万円に対して白糠平均が143.8万円、壮年層で本調査平均60.0

万円に対し白糠平均が 192.5 万円と差が大きくなっている。

表 2－5 個人年収、世帯年収

			なし	～ 100 万円	～ 200 万円	～ 300 万円	～ 400 万円	～ 500 万円	～ 600 万円	600 万 円～	不明	合計	平均	白糠 平均
個人 年 収	青年	男性				4	1					5	270.0	302.6
		女性	2	4	1	1						8	75.0	143.8
	壮年	男性			1	1	1		1	1		5	470.0	512.8
		女性	1	3	1						2	5	60.0	192.5
	老年	女性	3	8	2							15	53.8	115.9
	計	男性			1	5	2		1	1	2	10	370.0	340.1
		女性	6	15	4	1						28	61.5	145.2
世帯 年 収	青年	男性				1	1	2	1		1	5	410.0	566.7
		女性		3	1		3					8	192.9	532.4
	壮年	男性			1		1	1		2		5	530.0	731.5
		女性		1	2	1			1		6	5	230.0	695.1
	老年	女性		4	1	1	1	1		1		15	261.1	361.4
	計	男性			1	1	2	3	1	2	7	10	470.0	506.9
		女性		8	4	2	4	1	1	1		28	231.0	545.6

注)「平均」「白糠平均」の単位は万円。

なお、表 2－6 では、われわれが過去に行ってきた札幌・むかわ調査、新ひだか調査、伊達調査と本調査でそれぞれ得られた個人年収を比較している。青年層男性は過去の調査と比較すると年収が最も高くなっている。これは、青年層男性の 5 人が定職についていることによると考えられる。一方で、壮年男性と青年層・壮年層の女性はこれまでの調査のなかでも最も年収が低い。

表 2－6 各調査の個人年収比較

単位：万円

		札幌・むかわ	新ひだか	伊達	白糠
青年	男性	200.0	225.0	200.0	270.0
	女性	122.7	90.0	80.0	75.0
壮年	男性	426.7	340.0	450.0	325.0
	女性	130.4	95.5	128.2	60.0
老年	男性	258.3	278.6	142.9	－
	女性	91.2	43.8	72.2	53.8

注) 伊達および白糠の壮年男性では、際立って収入の高い 1 名ずつをそれぞれ外れ値として平均の算出から除外している。

第 4 項 学歴と婚姻

出身階層と到達階層とを媒介するものとしては、学歴と婚姻関係にとくに注目をする。

最終学歴で注目されるのは、高等教育進学者が 1 人もいないことと、青年層でも 13 人中半数以上にあたる 7 人が高等学校へ進学していないことであろう。青年層男性では 5 人のうち 3 人が中学校卒、2 人が高等学校卒であり、青年層女性では 8 人中、中学校卒と高等学校卒が 4 人ずつである。

壮年層ではさらに極端であり、男性は 5 人中 4 人が中学校卒（うち 1 人は高等学校中退）、女性も 5 人中 3 人が中学校卒である。老年層女性に関しては、15 人中 12 人が義務教育段階までであり、そのうち 4 人は中学校卒業までもいわずに学校へ行くことをやめてしまっている。

ここで見られる学歴水準の低さは、決して地域的な問題だけではない。表 2－8 には本調査と平

行して行われた白糠住民調査の結果を参考として示している。日本の高等学校進学率は1970年代に90%を超え、ほぼ全入の時代に突入している。本章の区分でいえば壮年層の過半数までが全入世代といえる。実際、白糠住民調査において最終学歴が義務教育である者は、青年層では1人だけであり、壮年層でも男性の8.3%、女性の5.5%だけである。また、青年層では30%以上が、壮年層でも男性の20%、女性の10%ほどが短大・高専以上の高等教育を経験していることから、今回の調査で対象となったアイヌの人々の学歴水準が、白糠町においてもなお高くないものであることがわかる。

表2-7 最終学歴

		小学校	中学校	高等学校	専修学校	計
青年	男性		3	2		5
	女性		4	4		8
壮年	男性		4	1		5
	女性		3	1	1	5
老年	女性	4	8	2	1	15
計		4	21	11	2	38

注)「中学校」には「高等学校中退」と「専修学校中退」のそれぞれ1人ずつを含む。

表2-8 【参考】白糠町の最終学歴

		義務教育	高等学校	専修学校 専門課程	短大・ 高専	大学・ 大学院	その他	計
青年	男性	1	10	4	1	6	0	22
		4.5%	45.5%	18.2%	4.5%	27.3%	0.0%	100.0%
	女性	0	11	7	7	2	0	27
		0.0%	40.7%	25.9%	25.9%	7.4%	0.0%	100.0%
壮年	男性	5	35	8	2	10	0	60
		8.3%	58.3%	13.3%	3.3%	16.7%	0.0%	100.0%
	女性	4	49	10	7	2	1	73
		5.5%	67.1%	13.7%	9.6%	2.7%	1.4%	100.0%
老年	男性	34	49	7	2	13	3	108
		31.5%	45.4%	6.5%	1.9%	12.0%	2.8%	100.0%
	女性	48	50	12	5	2	1	118
		40.7%	42.4%	10.2%	4.2%	1.7%	0.8%	100.0%
計	男性	40	94	19	5	29	3	190
		21.1%	49.5%	10.0%	2.6%	15.3%	1.6%	100.0%
	女性	52	110	29	19	6	2	218
		23.9%	50.5%	13.3%	8.7%	2.8%	0.9%	100.0%

注) 白糠住民調査より作成。

表2-9は、調査時点での婚姻関係を示したものである。未婚の者は全部で7人、既婚の者は13人、過去に結婚をしたが離婚して今は配偶者がいないという者が4人、過去に離別しているが再婚し配偶者がいる者が6人、配偶者と死別している者が8人となっている。若い世代である青年層でも13人中4人が離婚を経験している。また、壮年層の女性については、5人全員が離婚もしくは配偶者との死別を経験している。

表2-9 婚姻関係

		未婚	既婚	離別	再婚	死別	計
青年	男性	2	2	1			5
	女性	3	2	2	1		8
壮年	男性	1	4				5
	女性			1	2	2	5
老年	女性	1	5		3	6	15
計		7	13	4	6	8	38

第2節 アイヌの人々の階層分化

第1項 男性の階層形成

青年層5人、壮年層5人のデータを使い、男性の階層形成過程を見ていこう。ただし、対象者のなかに1人際立って個人年収、世帯年収の高い者がいるため、前節同様、この1ケースは除いて分析を試みる。

表2-10は、血筋、15歳時の生活ぶり、最終学歴ごとに現在の平均個人年収、世帯年収を比較したものである。

血筋から見ると、個人年収は両親アイヌが330.0万円で片親アイヌが250.0万円と、両親ともアイヌである者の方が高くなっている。一方、世帯年収は「両親」410.0万円に「片親」400.0万円と、ほとんど差はない。

15歳時の生活ぶりでは、「普通」が個人年収250.0万円、世帯年収350.0万円であるのに対し「貧しかった」者は個人年収275.0万円、世帯年収400.0万円であった。若干、「貧しかった」者の方が高くなっているが、ほぼ同水準であるといえることができるだろう。

明確な差が生じているのは最終学歴である。前節で確認したとおり、本調査対象の男性は全員が中学校か高等学校が最終学歴となっている。最終学歴が中学校である者は個人年収が266.7万円、世帯年収が333.3万円であり、高等学校である者は個人年収が約80万円高い350.0万円、世帯年収が約170万円高い550.0万円であった。

血筋や15歳の頃の生活ぶりが現在の収入にあまり影響を与えず、学歴で大きな収入の差が生じるということは、白糠町のアイヌの男性社会では、出自とは無関係に学歴＝能力だけで社会的地位が決まるという、「学歴社会」が成立しているということであろうか。

実は、高等学校卒業である3人はいずれも現在の職業が漁業である。そして、現在の職業が漁業である者は最終学歴が中学校卒業である1人も含めて4人おり、その平均個人年収は350.0万円、世帯年収は500.0万円であるのに対し、非漁業である5人は個人年収が250.0万円、世帯年収が330.0万円となっている。また、ここまで外れ値として扱ってきた1ケースも漁業である。

15歳時の生活ぶりを確認し直すと、漁業の場合「豊かだった」が1人、「普通」が2人、「貧しかった」が1人であり、非漁業の場合、「普通」が2人、「貧しかった」が3人である。さらに、現職が漁業の4人はそのうちの2人が家業であり、1人も親戚が漁業関係者であった。

つまり、白糠町のアイヌの人々の間に成立しているものは学歴社会ではなく、漁業を中心とした再生産構造であるようだ。家業が漁業であり、そのため子ども時代に生活水準が比較的高かった者が高校へ行き、そのまま家業の漁業を継いで比較的高い収入を手に入れている。ただし、漁業それ

自体は危険が大きく、本調査対象者でも身内を海で亡くした者が多くいる。また、年による収入の変動もあり、決して安定的な職ではない。そういったこともあってか、転職して漁業に就いた対象者は、漁師をしていたアイヌの知り合いから「漁師はあまり良くないよ」と反対されたという。

教育達成や安全な、あるいは安定した職業などが単純には経済的な地位に結びつかない、特殊な形の階層形成メカニズムが存在している。

表2-10 男性の平均個人年収と平均世帯年収

		N	平均個人年収	平均世帯年収
血筋	両親アイヌ	5	330.0 万円	410.0 万円
	片親アイヌ	4	250.0 万円	400.0 万円
15 歳時	豊かだった	1	550.0 万円	650.0 万円
	普通	4	250.0 万円	350.0 万円
	貧しかった	4	275.0 万円	400.0 万円
最終学歴	中学校	6	266.7 万円	333.3 万円
	高等学校	3	350.0 万円	550.0 万円

第2項 女性の階層形成

続いて女性の階層形成過程を検討する。ここで使用するのは青年層と壮年層のデータである。老年層を分析から外しているのは、そのほとんどが年金での生活となっているためである。また、世帯年収不明の1名も分析から除いている。

さて、女性の経済的地位を考察するためには、第1に有職者であるかどうかというポイントがある。対象の12人のうち、有職者は7人、専業主婦を含む無職の者は5人である。その収入差は歴然としており、有職者は個人年収が107.1万円、世帯年収が278.6万円であるのに対し、無職の者は個人年収が30.0万円、世帯年収が110.0万円である。

無職である者は、専業主婦と、配偶者と離別、死別をした後に生活保護を受けて育児をしている者にとわけられる。したがって、ここでは女性にとっての離別、死別が貧困リスクを高めることを指摘するにとどめておく。

表2-11 女性有職者と無職者の年収比較

		N	平均個人年収	平均世帯年収
就業状況	有職者	7	107.1 万円	278.6 万円
	無職（専業主婦を含む）	5	30.0 万円	110.0 万円

一方、有職者の7人に目を転じると、そこには大きな要因と考えられるものは見出されない。札幌・むかわ、新ひだか、伊達で行ってきた先行調査では、女性の経済的地位を決めるものとして配偶者の存在や、同居家族の存在が指摘されてきた。また、様々な階層研究や貧困研究は、学歴の影響のほか、離婚回数、転職回数のようなライフイベントのリスクを指摘している（鹿又 2012；岩田 2007；野崎 2014b）。

しかし、本調査で最も世帯年収が高い女性は離別者であり、転職回数も対象者のなかで2番目に多い。先行研究でいえば貧困リスクが非常に高いといえる。それでいて世帯年収が高いのは、同居している子どもの収入による。

また、個人年収が最も高い者は未婚であり、かつ対象者のなかで最も若い。職業は母親が経営し

ている居酒屋の店員であり、これは対象者の年収の高さというよりも、他の対象者の年収の低さを象徴しているといえる。

ひとつ、構造的な特徴があげられるとすれば、15歳時の生活ぶりが「豊かである」「普通」と答えた3人はいずれも高校へ進学している一方で、高校へ進学しなかった3人はいずれも15歳時に「貧しかった」と答えていることである。これは、出身階層が教育達成に影響を与えているといえる。しかし、影響が及ぼされるのはそこまでであり、最終学歴別の平均年収を見ると、中学校までの者の個人年収が116.7万円であるのに対し、高等学校卒業者は100.0万円とほとんど差が生じていない。では、学歴が個人年収の差を生じさせないのはなぜか。

まず、表2-5で見たように、女性の個人年収は最も高いもので200～300万円未満と、そもそも低いということがあげられる。また、配偶者がいる者はパート労働をしがちであるため、そこでも個人年収が伸び悩むことになる。さらに、女性の場合、職業キャリアが結婚や配偶者の転勤による引っ越し、または離婚等により分断されがちなことも理由となっている。ある対象者は高校を卒業後、経理の仕事に就いたものの自己都合から1年で退職、その後すぐに別の仕事に就いたものの、出産や転居、再度の出産、離婚などのたびに転職を余儀なくされている。

これらの事情が互いに関係し合い、学歴の効果をなくしているようである。

表2-12 女性有職者の平均個人年収と世帯年収

		N	平均個人年収	平均世帯年収
血筋	両親	2	100万円	150万円
	片親	5	110万円	330万円
15歳時	豊か	1	50万円	550万円
	普通	2	50万円	200万円
	貧しかった	4	150万円	250万円
最終学歴	中学校	3	116.7万円	216.7万円
	高等学校	4	100万円	325万円
婚姻	未婚	2	150万円	200万円
	配偶者あり	3	83.3万円	283.3万円
	離別・死別	2	100万円	350万円

注)「最終学歴」が「専修学校」である1人を、特定を避けるため表から除外している。

第3節 アイヌの人々の教育達成の阻害要因

第1項 進学希望者の事情

これまでに見たように、白糠町のアイヌの人々にとって、より上位の学校へ進学するということは階層の上昇に対してあまり意味を持たない。このような状況は、われわれが行ったこれまでの調査でも部分的に確認されている(野崎 2012, 2013, 2014a, 2014b)。

だが、進学が階層移動に意味を持つかどうかとはまた別に、なぜ進学しないのか、あるいはできないのかという問題が存在する。白糠のアイヌの大きな特徴として高等学校進学率が低いことがあげられる。対象者の話のなかには、最終学歴が中学校であるために就職、転職で苦労をしたというものもある。では、進学を妨げているものはなんであるのか。

上の学校へ進学したかったかという質問への回答を分類すると、したくなかったという者が22人、したかったという者が14人、不明が2人となり、したくなかったという者のほうが多い。こ

れだけを見ると、自分の意思で進学をやめた者が多いようにも見える。だが、積極的に進学をしたいと考える者は和人にも多くいるはずである。しかし、表2－8でも見たとおり、青年層と壮年層に関しては白糠町民の9割以上が高校へ進学している。このような差は、本当に進学に対する意欲だけで説明できるのだろうか。

まず、進学したかったが断念したという14人の断念した理由を見てみると、7人が経済的な理由をあげている。

- (ア)高校には行きたいと思ったけど、お父さんに「おまえを高校に行かせる金はない」と言われたから。(青年層女性：中学校卒)
- (イ)高校に行きたかったんですけど、生活苦なもので、高校に行かないで就職を選んだんですよね。(青年層女性：中学校卒)
- (ウ)親にも苦勞をかけたくない、少しでも楽させてあげようっていう気持ちがあつて。(青年層女性：中学校卒)
- (エ)母子家庭だったんですよ。ずっと、お金がないというのもわかっていたので、早くに働いてと言われて高校にはいかなかった。(青年層男性：中学校卒)
- (オ)もちろんしたかった。ただ、経済的な面で断念せざるを得なかった。絶対したかったよ。(老年層女性：専修学校卒)
- (カ)(推薦で高校から授業料免除でオファーがあり)当たり前です。行きたかったですよ。だけど白糠から釧路まで通う汽車賃がないから止めてくれって言われたの。(老年層女性：中学校卒)

経済的な要因について多いのは家庭の事情である。

- (キ)高校受ける力あるからって(教師が)何回も来ただけど、うち、子どもいっぱいいるし、この子が家のご飯支度してくれなきゃ困るからって高校行けなかったの。(老年層女性：成人後に通信制高校卒)
- (ク)大学には行けたんだけど船をもっと大きいの造るということになって、その積立金を、入学金あるでしょ、(中略)だからそれをちょっと我慢してくれって言われて。(老年層女性：高校卒)
- (ケ)両親が反対したんですよ。「金銭的に困るから」と取ってつけたようなことを言っていたんだけど。要するに、父いわく「向こうの人間と結婚したら困る」って言ったんですよ。「白糠から出さない」って言い張って。(壮年層女性：高校卒)

小さな弟妹の子守のために学校をやめざるをえなかったという話は、(キ)の事例以外にも老年層女性でいくつか聞かれた。また、(ク)は、家庭自体は比較的裕福であったものの、船の購入という家庭にとっての一大事が自身の進学のタイミングで訪れたために進学を断念した。父親は進学を断念させたことを「死ぬまで謝ってた」という。

その他には卒業前に妊娠をしたからといった理由も聞かれた。

進学を希望していたにもかかわらず断念をしたというケースには、2つの特徴が見られる。1点は、女性が多いことである。進学を希望していた14人のうち、12人までもが女性であった。経済的な事情で断念をしたケースの中にも、弟は進学をしたという者はおり、かつて多く見られた、経済的な余裕が少ない場合に男兄弟の進学を優先するという事情が残っていたことがわかる。

もう1点は、経済的な事情による断念という理由が、決して過去のものではないということである。明確に経済的な問題と語った者は7人いたが、そのうち老年層は2人、壮年層は1人で、4人が青年層であった。先に見たようなアイヌ世帯の貧しさが教育機会に未だに影響を与え続けていることがわかる。

第2項 進学を希望しない者の事情

そもそも進学を希望しなかった者は、なぜ希望しなかったのか。多いのはやはり、「勉強が嫌いだから」といった者である。

- (コ)勉強が好きじゃないからっていうのもあったし、早く親のもとから離れたかったつうふうに思うし。(青年層女性：中学校卒)
- (サ)ぜんぜん。頭が悪かったの。そんなレベルじゃないんで。(壮年層男性：中学校卒)
- (シ)思わない。だって勉強嫌いだったもん。(老年層女性：中学校卒)
- (ス)いや、私頭悪い。(老年層女性：中学校卒)
- (セ)勉強が大っ嫌いだから。よく考えたら、なんで俺、大学に行きたいだろうなと思って。(青年層男性：高校卒)

また、働きたかったからという者も、勉強が嫌いという者と同様に多い。

- (ソ)もう、仕事がしたかった。(青年層男性：高校卒)
- (タ)みんなより先に社会に出ればと思っていただけで、今になったら行けばよかったな。中卒ならどこも仕事ないから。(青年層男性：中学校卒)
- (チ)早く働きたかったから。早く車が欲しかったから。(壮年層男性：中学校卒)
- (ツ)学校行くよりもどこかで働きたかった。(老年層女性：中学校卒)

その他には、とくに理由はないという者や、老年層を中心にそういう時代ではなかったという者、家庭の経済的な事情もありそもそも進学という意識に至らなかったという者もいる。

ただ、ここで注目したいのは、以下の3ケースである。

- (テ)いや、差別されるのが嫌だったから。中学校の後半はほとんど学校に行っていなかったのですよ。(壮年層女性：中学校卒)
- (ト)ないです。いじめとかなんとかで、学校生活ってあんまり楽しいなって思ったことないし。(壮年層女性：中学校卒)
- (ナ)学校に行かなくてよっていう事だけで解放されたような気がしていたんですけど、社会

に出てからやっぱり学校行けばよかったなーと思いました。(老年層女性：中学校卒)

ここで共通するのは、いじめや差別により、学校が楽しい場所ではなくなっているという事実である。(ナ)のケースも、友だちだと思っていた人に身体検査時に「近づくな!」と言われたり、いじめや仲間はずれがあったりし、また教師も助けてくれなかったため、学校が息苦しい場となっていたと言う。

この3人のほかにも、学校時代の差別的ないじめ経験を語る者は多い。また、そのような行為に対して教師が何もしてくれなかった、あるいは教師自身が差別的な、心ない言動をとっていたという者もいる。

(二)ある日ね、先生がクラスの前で「じゃあ〇〇(二の名前)、その踊り(アイヌ舞踊)やってみろ」っていうことになって。「やだよ」って。して「何で」って。「できないんなら、じゃあいいわ」ぐらいの感じなの。わかる?あれ。「じゃあ、いいわ、いいわ」みたいな、何かちょっとイラっとするあれ、あの感じで言われて。俺はもう、やったって何にも伝わるもんじゃねえと思ったから、ばかにされて終わりだなと思ったから。そして歌もないのに踊れっていきなり言われて。歌じゃないんだぞ、アカペラでいけるとかそういう話じゃ、歌に合わせて踊るもんなのに、踊りをまず「いい、いいって、踊りだけでも見せれ」みたいなね、言われて。で、まあやったら案の定ばかにされたよね。だけど逆にそれがあったからみんな俺をアイヌだってのはもう認識したし、それでアイヌだって言ったもんだら「何こら」っていうような感じで言ってたから、別に早いうちに逆にね、良かったかもしれないけど。でもあの屈辱は忘れない。今思い出しても胸くそ悪いなと思う。見せ物にされたっていうかね。何かもう。(青年層男性)

中には同級生からの差別やいじめに対してやり返していたという者もいるが、これらの経験が学校という場への不信感を高め、否定的にとらえさせ、意識を進学から遠ざけていたという側面はあったのではないだろうか。

第3項 高校進学と奨学金事業

進学を希望した者であっても、希望しなかった者であっても、経済的な事情が大きな影響を与えていることがわかった。現在まで続く貧困問題は、アイヌの人々を語る上で避けて通ることができないものであり、それだけにかねてより対策がとられてきている。北海道は1974(昭和49)年より北海道ウタリ福祉対策をすすめており、高校進学格差の是正のため、高等学校等進学奨励費補助金事業が始まった。その後、補助の対象は専門学校への進学や通学に関する交通費などへも拡大されている。高等学校等進学奨励費補助金事業自体は本調査時点で50代半ばだった者が高校へ進学した時期から始まっている。すなわち、青年層、壮年層は高校進学に際し、補助金を受けることができる立場にいた。だが、実際にはこれまでに見たように、青年層、壮年層でも多くの者が経済的理由により高校への進学を断念している。

今回の調査対象者のなかで、ウタリ対策の援助を使った者は4人だけであった。使用したかどうか

かわからないという者もいるが、多くは経済的な問題を抱えつつも、奨学金を受けていない。

ひとつには、奨学金の額が入学支度金 23,100 円以内、修学資金が国公立の高校で月額 23,000 円以内、私立の高校でも 43,000 円であり¹⁾、高校進学にかかる学費や生活費²⁾をすべてまかなえるほどではないという事情があるだろう。だが、経済問題と奨学金との関係に関する問題はこれだけではない。

第 1 に、以下の (ヌ) に見られるように、奨学金を使うことでアイヌだから進学できたと馬鹿にされることを危惧する者がある。アイヌ政策についての質問でも、特別な施策は逆差別になるという意見が聞かれるように、「アイヌのための奨学金」に対し抵抗を示す者があるようである。(ヌ) のケースでは、夫がこのような考えから努力をし、5 人の子どもを短大、大学まで進学させているが、そうならずに進学を断念してしまったケースもあったかもしれない。

(ヌ) そんなこと (奨学金を使うこと) したらあれだし、子どもも大きくなったら馬鹿にされるからって。

(中略) (質問者：アイヌだからといって、優遇されて行くことで、おまえはアイヌだからなっているふうには馬鹿にされるんじゃないかってお考えだったということですね?) うん。アイヌはアイヌに間違いないんだけど、そのお金を使って行ったんじゃないかって言われたら嫌だなんて。(老年層女性：子どもにウタリ奨学金を使ったかという話で)

(ネ) 父親母親が嫌いだったから、そういうの。その時代からあったの? (対象者の時代はまだ制度がなかったことを確認し) (あったとしても) 受けてはいなかったわ。(老年層女性)

第 2 に、手続きの煩雑さを指摘する者がある。(ノ) は、高校まで進学しているものの、奨学金を使うことを勧められても面倒であるためすべて断っていた。また、ウタリ奨学金とは別のケースではあるが、(ハ) はアイヌの入学枠をもつ大学への進学を考えたものの、血筋なども調べなければならない煩雑な制度に進学をやめている。(ハ) はもともと「勉強が大っ嫌い」でありながら、アイヌのことについては「別に苦にならなかったし、もっと知りたいなと思ってた」と言っており、手続きによって学ぶ機会がなくなってしまったことになる。

この点については、税金から出る奨学金であり、また未返還問題³⁾などが指摘される中で、手続きの厳密さが求められることはある程度仕方のないことともいえる。だが、実際にその手続きのために利用を躊躇する者が存在することはたしかである。

その他にも、子どもが育ったのが北海道外であったために、そもそも制度を受けることができなかったことを指摘する者もいる。アイヌへの諸制度が北海道在住のアイヌに対してのみ適用されることに対する異論は多い。

(ノ) (ウタリ奨学金を使わなかった理由を聞かれ) 面倒くさいから (笑)。話は来てたけど、全部「いや、いいわ」って言って。(青年層女性)

(ハ) 学力とか関係ないんだわ。推薦みたいな感じでさ。作文書いたりとか、あとそれこそ血筋? みたいなやつとか。だったはずなんだよな。とりあえず作文書く時点で面倒くさいって蹴っただけ。いいから黙って入らせれやって正直思ってたの。アイヌのことやって別に

苦にならなかったし、もっと知りたいなと思ってたから、学べるんだったら、学べてしかも場所良い所だったら喜んで行きますって思ってたんだね、たぶん。(青年層男性)

もちろん、ウタリ奨学金はアイヌの人々の進学の一助になっていることはたしかである。対象者で奨学金を利用している者は少ないが、子ども、あるいは孫には使ったという者は8人おり、世代を追って利用者が増えていることが示唆されている。貧困と進学の関係性が強いことが示されるなかで、制度をどのように活用していくのかを議論していくことは重要である。

第4節 まとめ

本章では、白糠町のアイヌの人々がどのように階層を形成していくのか、その過程を分析してきた。最後に、得られた知見をまとめておく。

まず、第1に指摘できたのは、高校進学率の低さである。白糠町民調査の結果と比較しても高校進学率が低いことは明らかであり、さらに、高等教育まで進んだ者はいなかった。このことは、対象者の平均年収も白糠町民調査の数字よりも低くなっていることと関係があるだろう。

男性の階層形成過程で特徴的であったのは、漁業という職業の特殊性である。青年層、壮年層の収入は、高い漁業と低いそれ以外の職業という色分けがはっきりしている。また、漁業は高校進学者の状況とも関連している。危険でありかつ、不安定であるというリスクがありながらも、白糠町のアイヌ男性にとって漁業は特別な地位にあるといえる。

一方、女性の階層形成を見ると、そこに大きな特徴は見出されなかった。出身階層は進学に影響を与えているように見えるものの、学歴が現在の職業や経済的地位へ与える影響はほとんどない。過去の札幌・むかわ調査などで見られた婚姻状況や離婚といった要素も現状へはあまり影響を与えていなかった。それらよりも、女性の場合は様々な要因により職業キャリアが細かく分断され、そこに女性の給与水準そのものの低さが関連することで、学歴等と無関係に経済的地位が低くなっていることが示唆された。

また、男女共通する大きな特徴である進学率の低さをさらに掘り下げていくと、進学を阻害する要因として貧困だけでなく、差別やいじめの存在、道内在住アイヌしか受給できないという奨学金自体の性質、さらには手続きのあり方といった要素が関係しあっていることがわかった。高校進学や大学進学の価値を過大に評価するつもりはないが、教育達成が上がることで、漁業に就く以外は経済的地位を高める可能性が限られるという状況が少しは変わるのではないだろうか。

注

- 1) 北海道アイヌ政策推進室「北海道アイヌ子弟高等学校等進学奨励補助制度について」(http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/koukou_fy26.pdf)を参照。
- 2) 進学にかかる経費としては、さらに進学せずに就職をした場合に得られたはずの「放棄所得」を考慮する必要があるため、実際の負担感は授業料等と奨学金の比較以上に大きい。
- 3) 貸付であるアイヌへの奨学金がほとんど返還されていないことが問題視されている。しかし、もともと給付制度として始まり、貸与制に変更されてからも減免規定などの利用で「ほとんど給付に近いものとして保障していた」(青木 2015: 144)として、アイヌ側を擁護する者もいる。

参考文献

- 青木陽子, 2015,「札幌におけるカウンター行動と金子市議への議員辞職勧告決議を求める署名活動」岡和田晃・マーク・ウェンチェスター編『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社, 136-148.
- 岩田正美, 2007,『現代の貧困 ワーキングプア／ホームレス／生活保護』ちくま新書.
- 鹿又伸夫, 2012,「結婚・配偶者と就業所得——結婚プレミアムと結婚ペナルティ——」『三田社会学』17, 61-78.
- 野崎剛毅, 2012,「階層形成過程と階層分化の要因——階層形成過程としての生活史——」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 95-108.
- , 2013,「アイヌ民族の階層形成」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 30 新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 30-37.
- , 2014a,「アイヌ民族の階層形成」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 31 伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 33-41.
- , 2014b,「「アイヌの貧困」の諸リスク」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その3 現代アイヌの生活と意識の多様性——2008年北海道アイヌ民族生活実態調査再分析報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 27-44.

(野崎 剛毅)